

東京、三省堂發行) (鈴木)

し必然の世界に住み乍ら理想を求めずにはゐられない人でなからうか。「ラファエロの聖母畫」、「アルベルティの繪畫論」の如きも博士の斯様な半面を示すものといふべきであらう。「ゴッテットの問題」の如きもその中に様式論のやうな基礎的問題が取上られてゐる點で特殊専門家の評價に止まるべきものと思はれないが既に紹介の紙面も盡きたので割愛しなくてはならぬ。

唯最後に一言讀後の所感を述べることを許して貰ひ度い。それは本書が夫々に獨立の主題をもつた論文の集成であつて體系的敘述でないといふことに對する不満である。勿論排列された各篇相互の間に一應の關聯が認められぬではないが、各篇相互のつながりが論理的必然性をもつてゐない、各篇の内容を結び合せて一つの纏つた印象に到達するかといふに必ずしもそうではなく、一體に全篇を通じての統一が稀薄で構成的でないことは前に擧げた著者の立場の論理的徹底性を缺くことと共に吾々にとつては物足りない點といはねばならない。巻頭に掲げられた「ルネサンス時代概觀」の一篇は恐らくそれを補ふ趣旨のものかと想像されるが、その餘りにも平板低調な記述は却つて後續諸篇の眞價を傷ける虞なしとしない。固より體系的記述は輕卒に要求せらるべきものではない。一小篇と雖もその含蓄あるものは徒らに老大粗雑な體系に勝ることは斷るまでもない。唯吾邦においてよく之を成し遂げ得る人が博士を措いて他に求め難いことを思へば、吾々の不遜な要求も恕せらるべきであらう。博士にして健在なる限り吾々は之を明日に期待して差支ないと信するのである。(菊版、定價金六圓)

○ Friedrich Meinecke: Schiller und der Individualitätsgedanke. Eine Studie zur Entstehungsgeschichte des Historismus. 1937.

本書はライプツィヒの Felix Meiner Verlag 刊行の「科學と時代精神」叢書の第八輯として公刊されたものであり、僅々五十頁に満たない小冊子にすぎないのであるが、併しその副題が示してゐるやうに、マイネッケがさきに發表した大著「歴史主義の成立」(本誌、第二二卷・第二號紹介欄参照)の續編をなすものであつて、此の問題に對する彼の研究のその後の進展を廣く學界に告げるものとして注目さるべき充分の意義を有つものであらう。すでに前著に於いて、彼の所謂歴史主義の成立期に於けるドイツの偉大な思想家・詩人達の思想が Individualität 及びその Unersetzlichkeit, Eigenesetzlichkeit の思想の生長に對してどのやうに意義づけられるべきかを考へたマイネッケは、今本書に於いて更に一步を進めて此の考察をフリードリヒ・シラーに向けやうとするのである。さきには、レッシング及びヴィンケルマン、メーゼル、ヘルデル、ゲーテが彼の思索の照明を浴びた。今度は、シラーをその同じ舞臺に登場させやうと云ふのである。

シラーの思想の發展が、通常説かれる如く、もしも三つの時期——即ち未だカント哲學の影響を受けない第一期、次にカントの影

響の下に自己の思想的立場を確立した第二期、最後にゲーテ及び
ヴィルヘルム・フォン・フムボルトに影響された第三期——に分つ
て考へられることが出来るとするならば、マイネッケが本書に於
いて考察の對象とするシラーは、此處に謂ふ第二期及び第三期
——特に此の二つの時期の過渡期に於けるシラーに他ならない。

マイネッケによれば、「歴史主義の核心は、歴史的・人間的生の、
一般化的考察の代りに、その個別化的考察を置き換へる點に存す
る」のであるから、此の二つの時期——殊にその前者から後者へ
の過渡期に於けるシラーの思想の動きが、特に歴史主義の成立史
を書かうとするマイネッケの深い關心と限りなく興味とを惹きつ
けたことは想像に難くない。實際、此のやうな思想的轉換期に立
つてゐた頃のシラーの思想の推移こそ、誠に絶好のテーマをマイ
ネッケに提供するものと云ふべきであらう。尤も、歴史主義の成
立の問題をば、マイネッケのやうに、單に Individualität 及びその
Unersetzlichkeit, Eigengesetzlichkeit の思想の生長と云ふ如き側
面からのみ捉へてゆかうとする態度に就いては、或はそこに問題
がないわけではなからう。Individualität の思想が歴史主義と云ふ
十八・九世紀の一大精神運動の中に於いて占める場所は、勿論、小
さくはない。併し同時に、Individualität の思想の展開がたゞそれ
だけで直ちに歴史主義の成立の問題を説明し悉すものでないこと
も、同様に明かであらう。歴史主義の成立の問題は、マイネッケの
考察してゐる如き側面とは異つた他の二三の焦點から考察される
こともまた可能であらうし、またそれはかゝる考察をも必然的に

要求するものであらう。少くとも、それが Individualitätsgedanke
の生長と展開の問題以外に尙ほ省らるべきいくつかの重要な論題
を含んでゐることは確かである。然しながら、今假りに歴史主義
の成立の問題をばマイネッケの立場に於いてそのやうな側面から
捉へてゆかうとするならば、「rein naturrechtlich-normative 思想
方法と individualisierend な思想方法との中間段階」に位置する
と考へられるシラーの思想の如きは、歴史主義の成立史に於いて
實に大きい意味を擔ふものと云はねばならないであらう。

斯くして、本書に於ける著者の意圖は、本来その天性によつて、
當時まで支配的であつた naturrechtlich-normative な思想方法に因
はれてゐたシラーが、その壯年期——特にゲーテ及びヴィルヘル
ム・フォン・フムボルトとの間に親密な友情の花を開いて後、如何
に Individualitätsgedanke の實を結んで行つたかと云ふ彼の思想
的遍歴の曲線をば、主として彼の書簡を中心に忠實に跡づけやう
とするに在る。そして此の企圖は、老大家の圓熟さを以て、見事
に果されてゐると云ふべきであらう。此處には、唯結論に當る部
分から一句を引くにとゞめたい。

「シラーが歴史主義の成立史に於いて占める位置に對して」次の
如き結論が生ずる。吾々が見出したのは、naturrechtlich-normative
な思想方法と individualisierend な思想方法との中間段階である。
藝術の領域に於いては彼は神々の多數——即ち理想的なもの
の individual なる多様性を許容し、此の認識をば後にはディナミッシュ
な發展思想によつて深化した……。然るに、倫理の領域に於いて

ては、彼は唯カントの *normative Sittenlehre* の唯一神のみを承認した。即ち、詩作するシラーと思索するシラーとの分裂である。「ところで、それにも拘らず、此の唯一神信仰——即ち、古き自然法がそれに於いて壮大な頂點を形づくつてゐるところの此の絶對的・無時間的なカントの道德律——は、二つのイデーによつて、*individualisierend* な思惟方法に近づけられてしまひ、斯くして、*individualisierend* な思惟法が起ることが出来たのであつた」(四三頁)。「シラーの内面に於ける、斯くの如き二つの世界の抱合は、何と驚嘆すべき現象であらう。彼の思想は、*generell* な *Veranmuthung* と *individual* な *Herz* との *Dualismus* をば充分に克服しえなかつた。然し、此の故にひとは彼の云は、*内面的統一* を否定し、彼の發展に對して内面的・有機的な關聯を否認すべきであらうか」(四四頁)。

そしてマイネッケは、次の如き言葉を以て、本書の最後を結んでゐる。「*Generalisierend und individualisierend zugleich hat er auf Mitle und Nachwelt gewirkt.*」(四七頁)。

尚、最後に——私自身の讀後感を附加へることを許して頂くならば——本書に於いて最も興味深く感ぜられるところは、マイネッケがシラーの思想なり個性なりを取扱ふその方法論的態度であらう。此の點から云つて、特に本書の後半の内容は一般にマイネッケの精神史の方法論の具體的展開として——シラーや歴史主義成立の問題を離れて——注意さるべき多くのものを含んでゐるのではなからうか。彼自身も「これは精神史の研究一般に對して方

法論的に意義を有つものであるやうに思はれる」(四五頁)と云ふ言葉を吐いてゐる。こゝで問題になつてゐるのは、*Individualium*, *Typus*, *Generation*, *Tendenz* 等々の概念であつて、マイネッケは、これらの概念が精神史の研究に於いて方法論的に如何に意義づけらるべきかを——シラーの場合を實例にとつて——具體的に教示してゐるのである。こゝに至つては、問題は、もはや單に歴史を考へる人々のみの領域に屬する事柄ではない。一般に、哲學する人々また精神史に何らかの關心をいだく人々に對してもまたひとしく考ふべきいくつかの論題を提出するものと云ふべきであらう。本書の如きは、凡そ何事かを考へ何事かを語らうとするすべての人々によつて必ず讀まれるべきものの一つであると云へないであらうか。(『*Wissenschaft und Zeitgeist*』, Heft 8, 47 Seiten. Felix Meiner Verlag, Leipzig, K.M. 1.80). (中山)

○地理論叢 第九輯

京都帝國大學文學部地理學教室編

この論叢も第九輯をみるに至つた。非商業的編輯のものがかく迄生長を續けて來たことについては發兌書院の努力に負ふ所も看過し得ないことと思ふ。初輯より第九輯に至る間には、之にペースベクテプを施せば、この間の變遷と動向を見出すことも難くないであらう。

本輯は研究・報告欄に七の論文を收めてゐる。淺井得一氏「本邦都市の人口地理學的考察」の如き視野の廣いもの、内田勲氏「臺